

二次加工のまなざしと経路依存性 —世界遺産白川郷の台湾人観光客を事例として—

林涛¹

要旨

世界遺産白川郷の観光現場で確認できた、日本人観光客と台湾人観光客の間にあるお互いの印象評価のギャップについて取り上げた。理由の分析から、観光の「まなざし」の「二次加工性」と「経路依存性」という特徴があることを提示し、人類学の角度から世界遺産をめぐるホストとゲストの関係について検討した。

キーワード：白川郷 台湾人観光客 観光のまなざし 二次加工 経路依存性

I. はじめに

ここ数年、日本政府はインバウンド誘致に力を入れてきた。ビザ取得要件の緩和、中国経済の発展などの理由により、日本を訪れる中国人観光客は急増した。一時期、爆買いぶりが話題となり、テレビの情報番組ではしばしば中国人観光客のマナーを取り上げ、京都などの観光地に中国人観光客が押し寄せるオーバーツーリズムを問題視してきた。その中でも、ときどきコメンテーターからは「中国本土より台湾・香港からの観光客のほうがマナーがよい」と言うような意見を聞く。同じ中国語を話す観光客だが、それぞれ日本人向けられるまなざしはだいぶ違うように思われる。それゆえ観光の現場では、中国本土以外の地域からの観光客は一体どのように見られているか、疑問を持つようになった。

この疑問を持ちながら、筆者は2019年12月から2020年2月の新型コロナウイルス感染の影響により観光業が停滞するまでの三か月間、日本国内某大手旅行会社が主催するインバウンド向けのバスツアーの添乗員として岐

阜県白川郷、高山市で体験調査を行った。世界遺産白川郷と飛騨の小京都高山は台湾人の間では絶大な人気を博し、通年にわたり大勢の台湾人観光客が訪れる。筆者がバス添乗員として向かった時期は、冬季の積雪時期と旧正月が重なる時期で、ちょうど台湾人観光客が一番多い時期でもある。調査の目的は世界遺産白川郷を訪れる台湾人観光客(ゲスト側)と日本人観光客、地元住民(以上二者はホスト側)の間には、どのようにお互いを見ているかを分析することである。

調査は主に以下の三つの方法を使用する。①自分の目による参与観察。②日本人ガイドと日本人添乗員へのインタビュー。③ネット上の台湾人観光客と日本人観光客の旅行記、口コミ。なお③番の方法に関しては、情報源は個人のブログ上に公開している白川郷旅行記、旅行口コミサイトであり、本研究は以下の理由から旅行記を重用している。まず、写真付の投稿が多いので、説得力がある。次にネット上の匿名投稿なので、インタビューのように取材者の出身地域への配慮の必要がなく、本音を拾いやすい。さらに、一つの観光スポットに複数の言語版の口コミが見られる

ので、比較できるメリットもある。本研究は特にサイト「フォトラベル²」（日本語のロコミ）と「トリップアドバイザー³」（日本語と繁体中国語によるロコミ）に書かれた白川郷に関するロコミを参考にしている。自分の母語ではない言語での投稿がないとは言いきれないが、あっても僅かであり、議論の方向性を左右する要素ではないと断っておきたい。香港か海外に住む華人も繁体中国語を使用するが、「トリップアドバイザー」の投稿者の地域情報項目が「台湾」と表示されるユーザーに絞り、訪問時期はすべて2010年以降のものに限った。また、観光人類学のアプローチからの調査であり、実際の内容を重視しており、全体を読んで大まかなロコミ傾向が分かるが、各項目のパーセンテージのような数字で判別する調査ではないため、細部まで正確に把握しきれない部分がある。日本人観光客は厳密に言えば、同じ「ゲスト」の範疇に入るが、白川郷を訪れるインバウンドへの「よそ者視」が多く確認でき、本稿では地元住民同様、「ホスト」側として扱う。

白川郷に関しては、これまで数多くの研究がなされ、合掌集落の保全、再生の過程に関する研究が、割合としては一番多い。特に村周辺のダム建設、高速道路開通により、観光地へのアクセスが便利なるに伴い、観光地としての変化に関する研究である。地域社会の連携、「売らない、貸さない、壊さない」の家屋保護政策などのアプローチからも多く、麻生[1]、黒田[9]、鈴木[15]、芹澤[16]、楊[21]などがある。特別な建築景観で世界遺産登録されたため、建築に注目する研究も多く、黒田[8]、麻生・西山[2]がある。多くはないが、住民の生活様式に注目した研究として、市川・羽田・松井[4]などがある。また、近年は外国人観光客の増加により、インバウンド関連の研究も見られるようになった。特徴としては、経済調査または経済調査の基礎作業と

も言えるような外国人観光客の消費特徴の分析、すなわち産業目線の研究が政府白書を中心に、市川・羽田・松井[5]、伊藤[6]などがある。インバウンド関連が多い理由は日本政府のインバウンド増加政策にあると考えられ、インバウンドについての社会学、人類学の研究は近隣の高山市を対象としたものが比較的多く見られる。白川郷の研究の多くは、高山市、下呂市など周辺自治体との全体の地域研究の一角に置かれている現状がある。平成の大合併で、白川村は村名ブランド維持のため、合併を拒否し、小人数ではあるが、独立維持を決意した。規模が小さいせいか、高山市と比べると、インバウンドの調査データが限られており、白川村役場 HP に公表されている観光資料が少ない手掛かりとなっているが、年度の更新も遅く学術研究には不便な面がある。本稿は主に観光人類学の視点から、地元住民、日本人観光客と台湾人観光客の間のイメージ像を分析し、観光のまなざしの「二次加工性」と「経路依存性」を明確にすることであり、まだあまり研究されていない分野の空白を埋める意義があると考えられる。

II. 研究地白川郷の概況

白川郷は、日本有数の豪雪地帯である岐阜県白川村に位置する。交通の不便さと奇妙な大家族制の民俗から、かつて長い間「日本の秘境」とされていた。1935年のドイツ人建築家ブルーノ・タウトの来訪は、白川郷の価値を世間が認知する契機ともなった⁴。1995年に富山県の五箇山合掌造り集落と一緒に世界文化遺産に登録され、登録直後の1996年には対前年比132.2%となる、約102万人の観光客の来訪を記録した⁵。そのなかで、特に荻町は59棟の合掌造り民家や合掌造りの寺院や展望台などを擁しているため、国内外から大勢の観光客が訪れる⁶。日本政府のインバ

ウンド増加政策により、外国人観光客が急増しており、2017 年時点の村人口 1, 668 人に対して、観光客数は 176 万を超えており、実に人口比の千倍以上の観光客が来訪している驚きの数字となっている⁷。急激に進んだ観光地化は、地元住民へ交通渋滞などの生活環境の悪化をもたらし、最近マスコミが問題視する観光公害の事例の一つとして取り上げられることになった⁸。

近年、観光公害の代名詞のように取り扱われがちなインバウンドに関しては、白川村役場公表の数字によると、2017 年の観光客の 37%(65, 200 人)が外国人である。しかし、白川郷の中心である荻町に関しては、口コミもしくは筆者の実感から見ると、外国人観光客は 8 割以上ではないかと考える。インバウンドのうちアジアからの観光客は 91%に上り、うち中国、台湾、香港合計の割合は 66. 3%になる。筆者は東南アジア人向けのバスツアーの添乗員を複数回担当したが、グループ内で中国語を使用する華人系の観光客も多く感じ、全体的に中国語圏からの需要が非常に高い観光地になっている。しかし、近年は統計上も、また日本人ガイドに聞いても、タイとインドネシアからの観光客が大幅に増えているとのことである。筆者が白川郷で調査を実施する理由にもなっているが、現在日本のどこに行っても中国人観光客であふれるなか、ここでは珍しく台湾人観光客が圧倒的に多く、台湾人観光客に向けられる観光のまなざしを研究する上では、理想的な観光地であると言える。

表 1 白川村における中国語日帰り客数の推移(2006-2017)

年/地域	中国本土	香港	台湾
2006	920 (1. 2%)		66 , 040 (84%)

2007	2 , 210 (1. 9%)	60 (0. 0%)	93 , 290 (78. 2%)
2008	4 , 420 (3. 4%)	80 (0. 0%)	93 , 780 (75. 7%)
2009	8 , 140 (11. 2%)	80 (0. 0%)	46 , 450 (64. 2%)
2010	8 , 831 (8. 5%)	5 , 234 (5. 0%)	57 , 836 (55. 6%)
2011	906 (1. 6%)	3 , 847 (6. 9%)	43 , 271 (77. 8%)
2012	2 , 235 (2. 8%)	6 , 738 (8. 3%)	51 , 254 (63. 1%)
2013	3 , 016 (2. 2%)	12 , 766 (9. 5%)	83 , 280 (62. 1%)
2014	12 , 992 (6. 7%)	13 , 794 (7. 1%)	112 , 306 (57. 6%)
2015	38 , 528 (16. 4%)	13 , 618 (5. 8%)	111 , 723 (47. 5%)
2016	89 , 250 (15. 9%)	35 , 924 (6. 4%)	250 , 348 (44. 6%)
2017	87 , 004 (14. 2%)	43 , 994 (7. 2%)	275 , 790 (44. 9%)

注：白川村役場の公表に基づいて筆者が作成。()の中はインバウンド全体を占める割合である。東南アジアの華人は統計困難であり、本稿では検討しない。

台湾人観光客の割合に関しては、2006 年の 8 割強から 2017 年の 5 割弱まで下落しているが、これは東南アジアからの観光客増加による結果だと考えられる。観光客実数では、台湾人観光客数はかつての 4 倍以上になっている。台湾の人口規模から考えると、白川郷が台湾人の海外旅行市場でいかに人気であるかが分かる。一方、中国本土からの観光客は 2015 年までは 5%以下の年も非常に多く、爆買い期に該当する 2015 年以降でも 15%前後しか来訪しておらず、人数から見れば、台湾人観光客数の 1/3 以下に留まっている。2011

年東日本大震災の時、中国人観光客は前年比90%の激減ぶりであったが、これとは対照的に、台湾人観光客は前年比25%しか減少しておらず、観光客に占める割合はなんと8割弱を記録した。これは当時震災下の日本を応援しようとする台湾人がたくさんいたためだと考えられ、この数字からも日本と台湾の友好関係を一瞥できる。

Ⅲ. 白川郷における台湾人ツアーの特徴

台湾人の旅行事情に関して特筆すべきことは、海外旅行の割合が非常に高いことである。2018年の人口約2,360万人に対する海外旅行率は70.5%であり⁹、海外旅行は台湾人にとって日常生活の一部であると言える。日本政府観光局の統計によると、2018年の訪日台湾人は4,757,258人であった。人口から見れば、これは毎年五人に一人が日本に旅行しているという驚異的な計算になるのである¹⁰。日本観光庁、政府観光局が各地域からのインバウンドの特徴に関して、毎年調査しているが、それによると、台湾人観光客は他のアジア地域と比べると、観光目的での来日が多く見られる。ガイド付きバスツアーの利用状況を見ると、韓国、香港の観光客利用が1割に対し、台湾人観光客の3割強が利用している。台湾人観光客の団体旅行の割合が高い背景としては、友人、家族、親族などのグループで余暇を過ごすことを好む特徴に加え、訪れたい旅行先が多様であり、団体旅行であれば、効率よく回れることが挙げられる。日数としては4泊5日の行程が多く、いわゆるゴールデンルートを巡るツアーではなく、地域内で完結するツアーが主流である。中国人ツアーと違って、首都圏関西圏だけではなく、中部地方にも多数訪れており、台湾旅行業品質保証協会の「団体ツアー参考料金一覧」(2019

年4月-6月)によると、訪日旅行ツアーの平均価格は、6日間で10-17万円となっている¹¹。

白川郷の台湾人観光客がバスで訪れる割合が高いのは、山間部にあり、鉄道駅から離れている白川郷の場所に関係している。個人旅行は中国人観光客より多く見られるものの、依然としてバスツアーを利用した観光形態が人気である。バスツアーの中でさらに細分すると、個人客が現地集合解散する日帰りバスツアーと、日本観光全体がバスツアーになっている二つのパターンに分かれている。

まず、日帰りバスツアーに関しては、言葉の壁があり、現地で予約するのではなく、基本的に日本へ出発する前に、台湾のオンライン旅行会社から予約している。筆者が調査した結果でも、新興オンライン旅行会社のKlook(客路)¹²とKKday(酷遊天)¹³の2社が主流のようである。2社とも「名古屋駅集合解散、高山+白川郷の一日ツアー」を主力商品にし、5900円~8500円と非常にお手頃な価格設定している。割合としては少ないが、「金沢集合解散、白川郷+五箇山+高山の一日ツアー」も見られる。運営形態は日本現地のカウンターパートと協力する形を取っており、大体日本の大手旅行会社のインバウンド部門が請負うことが多い。基本的に英語か中国語ができる日本人添乗員が一名、価格プランにより中国人添乗員をもう一名増員される場合がある(筆者の場合はこれにあたる)。添乗員は移動中の車内で白川郷と高山市の概況を紹介するが、観光地ではガイドしない。

日本での5日間の旅程を全部同じバスで移動する場合(以下、「まるきりバスツアー」と呼ぶ)は、基本的に白川郷を周遊ルート上の通過点の一つとして扱っている。小松空港を利用する北陸ツアーと中部国際空港を利用する中部ツアーの二大陣営になっている。どちらも北海道ツアーと同様、関東関西の廉価ツアーよりやや高級志向の傾向が見られる。

北陸ツアーは「金沢＋能登半島＋白川郷＋高山＋上高地＋立山＋雪の大谷」を回り、温泉を満喫するツアーである。北陸ツアーは2005年当時の愛知万博で混雑が予想された中部国際空港を避けて小松空港から入国して愛知万博を訪れるために周遊ルートを考えてのがきっかけである¹⁴。一方、中部ツアーは「名古屋＋妻籠宿（馬籠宿）＋高山＋白川郷＋上高地＋郡上八幡」を回り、名古屋で免税店を楽しんでもらうツアーである。内容から見ると、一部重複する部分があり、白川郷は両方のツアーに入る目玉スポットであることが分かる。まるきりバスツアーは会社によって、ガイドが説明しながら白川郷を回るケースもある。

日帰りツアーもまるきりバスツアーも白川郷での滞在時間は2時間程度で、二名以上のグループでの参加が多く、日帰りツアーの参加者の年齢層がやや若い。どちらも白川郷での活動範囲が荻町に限っており、荻町以外の白川村住民とは全く接触しないと言っていい。よって、荻町以外の白川村住民から見れば、バックパッカーで目立つ西洋人より台湾人観光客の存在は薄く感じられる。また、現在は、荻町でも観光業に携わる住民の割合が高くなっている。

本研究では「ホスト」と「ゲスト」の関係を論じる際に、一般の意味の地元住民のみをホストと見ると、サンプル数があまりにも少ないため、日本国内からの日本人観光客をホスト側として扱う事情もある。

IV. 台湾人観光客から見る白川郷

日本人ガイドへのインタビューから、白川郷に行くインバウンド観光客の感想が二極化することが分かった。一つは日本の原風景に感動するパターンで、一つはインドネシアとフィリピンなどの東南アジアからの観光客に集中する、本国に似たような茅葺屋根の家が

あるので、積雪がない日はがっかりするパターンである。台湾の場合は、白川郷に感動した声が殆どである。筆者は前文で言及した主要オンライン旅行会社 HP での書き込み及びトリップアドバイザーの書き込みを確認したが、信じられないぐらい高評価である。似たような書き込みが多いので、本稿ではある台湾人観光客のブログから代表的な感想文を紹介する。

白川郷に到着した際の感動について、「いくつもの山を越え、まるで桃源郷のような白川郷に到着した」と形容した。いざ合掌村へ入ると、「童話の世界に入っていくような感覚に陥った」と述べている。雪が降り続いており、辺り一面の銀世界、合掌造りの家屋は「どの屋根も雪が深く積もっていた」と驚いた様子である。辺りが暗くなる夕方や太陽が昇ったばかりの早朝に散歩したらしいが、どちらも宿泊者だけに許される「貴重な体験だった」と語った。村のあちこちで飛騨地方の玩具「さるぼぼ」を見かけたらしいが、さまざまな色の「さるぼぼ」が売られているのを見て、「日本人は商売上手」と感心している。雪がますます強くなり、歩くのも困難になってきたため、宿泊している民宿で長靴を借り、引き続き散策を続行した。そして、「目の前の全ての景色に興奮した」、もし選べるのなら、「白川郷のような四季の移り変わりを楽しめる場所に住みたい」と、すっかり魅了された様子である。白川郷の滞在はわずか1日間だったようで、「全て夢だったらどうしよう」と心配になって、離れ際に何度も振り返り、「違う季節にまた来よう」と決意した¹⁵。

このように白川郷の自然、原風景を天国のような景色と感心し、日本人のことも非常に高く評価している。筆者が調べた際も、高評価が99%以上のように感じ取られた。それだけではなく、「ゴミ箱がないから、台湾人の皆さん、持ち帰りお願いします」「唯一の残

念なところは観光客の多さ、地元住民大変だね」と、ホスト側の立場からの書き込みも多くみられる。逆に低い評価の書き込みはどのような内容か気になるところであり、筆者が確認した中で2件だけあったので、翻訳して紹介する¹⁶。

- a. 商業化されすぎ、どこ行っても別料金。人だらけ、全くイメージの静かな山村ではない。展望台の景色以外、残されたのは金、金だけ！
- b. 大雨の日でも長い行列。一番酷いのは雪で展望台が閉鎖されたこと。シャトルバスを待つには一時間もかかった。理想と現実の差が大きすぎる。

bのような出来事は冬季ライトアップ見学の完全予約制導入前に多く見られていたオーバーツーリズムの象徴だったが、日本のマスコミで大きく取り上げるなか、台湾人観光客の書き込みはわずかこの1件で、ある意味で驚きである。



写真 1 完全予約制導入前の行列 出所：2019年11月28日桜花学園大学観光総合研究所主催の公開講座配布資料、藤田雄也氏「小さな村の大きな挑戦」

V. 日本人観光客から見た白川郷と外国人観光客

東日本大震災で核汚染の風評被害のなか、台湾人観光客は日本を応援する気持ちで多数が白川郷を訪れていた。このような状況から、観光の現場では、マスコミ或いは世間が絶賛する日本と台湾の友好関係を容易に確認できると思っていたが、日本人観光客が書いた旅行記、口コミからは、意外にそうでもないことが分かった。

まず、白川郷の町全体に対する評価だが、日本人観光客と外国人観光客では分かれている。佐藤[11]で、本国では観光の専門家として活動する外国人研修員から構成される視察ツアーが白川郷の開発は景観を保護したうえの魅力あるいい事例と絶賛することを記録している。一般の外国人観光客として割合が一番多い台湾人観光客からも絶大な支持を得ているが、日本人観光客からは逆に「日本の原風景を失った」という不安視の書き込みが非常に多かった。「作られた世界遺産」というタイトルの書き込みがその代表例である。

以前ここを訪問したのは、世界遺産登録以前のかれこれ20年以上前です。改めて訪れてみたら町は綺麗に整備され、かつての素朴な山間の里の風景ではなく作られた観光地のような町並みとなっていました。土産店で「だいいぶ雰囲気変わりましたね」と話しかけたところ、「変わっていませんよ！変えちゃいけないのです。世界遺産なのだから。今や世界中から観光客が来るのだからね！」と、なぜか切れ気味な返答。なるほど、変わったのは世界遺産という言葉とおごり高ぶった人の心だけということか。まるで補助金で潤う原発村のようだと感じました¹⁷。

「日本の原風景を失った」という感想の理由として、一番に挙げられているのは「外国人観光客の多さ」であり、筆者の3000件以上の書き込みを閲覧した感想だが、「外国人観光客が多い」ということを言及しているのは三分の一以上に及んでいるような気がする。

割合としては非常に少ないが、外国人観光客が多いことをポジティブに考えている日本人観光客もあり、主に以下のような内容である。①遙々から来訪して、地方の観光業を支える有難さ。②国際交流のチャンス。③単純に外国人が多いから、面白い。

逆に、外国人観光客が多いことに対してネガティブな考え方を持つ書き込みを分類して見ると、①他の日本人観光客が来ないことへの失望感。例えば、「ここは日本ですかというぐらい、宿も通日も温泉も外国人ばかりです。この素晴らしい景色、文化を日本人に知ってほしいと思いました。和田家に展示されている蚕様って何って知らない日本人世代が多いことに驚きました。」②外国人が多すぎるにより商業化されたことへの失望感、危機感。「日本人が少なく種々の外国語が飛び交っていた。観光地が外国人を頼らなければ続けられない事情を垣間見た。」「昔は良かったが、人多すぎのしょうもない観光地に成り下がってしまった。一度行けば十分な観光地は数あるけど、ここは一度すら訪問する価値のない観光地である。なお、中国人や人込みが大好きな人は訪れる価値はあるだろう。」「数年前はまだ趣ある良い所だと思いました。今回はがっかりの連続。日本人は数パーセント、ほぼ外国の方。ブランド品で固めたアジア系の方、欧州の方はアウトドア系の服装。白川郷を見るのではなく、外国の方を見に行った感じ。本当に世界遺産?と疑問を感じずにいられません。」③店の人に中国人だと勘違いされたときの不愉快感。「二度ほど、中国人として対応されました。五平餅、飛騨牛など、とにかく高額で小さい。外国人用になった感、リピートはない。」「眼鏡で色黒、鼻が低く平坦な顔の私は、中国人に間違えられる予感がした。やはり村の人から、何の迷いもなく英語で話しかけられ、家族全員プツと噴き出して笑ってしまった。」④外

国人観光客のマナーへの問題視。この部分は割合として一番多く占めている。「天守閣展望台のトイレを使おうと思ったら、残念なことに、外国人の方のマナーが悪く、大便器の中に紙がたっぷり詰まっていた、使えなかった。」「観光客が多すぎると、東アジアからの観光客のマナーの悪さが不愉快です。」

「マジ!台湾人だらけですよ、観光客は申し訳ないけど、マナー悪すぎ!台湾は親日家だし、痰吐いていないけど、中国人よりましだけど、辺りかまわず所かまわず、写真バチバチだし、現地の方は生活しているのに、うちの中の方まで乗り込んでいって、写真バチバチ。日本人3割、外国人7割、そのほとんどが台湾系ってガチです、ここは日本ですか¹⁸⁾」「雑踏から聞こえてくる声はほとんど中国語、中国人は声がでかくて下品。興冷め。全体8割中国人ではなかろうか。どこでもお構いなく写真撮影しているので、歩くのが大変¹⁹⁾。」「外国だとクラクションが鳴り止まらないところだが、運転手が忍耐強く待っていた。思わぬところで日本らしさを再確認。」

「団体客のマナーが最悪、住民や宿泊客が寝ているような早朝に団体バスで来訪して大声で騒ぐ、もう二度と行かない。」「乗車場所付近で、特に中国の方々がきちんと並んでいないので結果的に割り込んでしまったかもしれない。」以上のように、衛生問題、写真撮影マナー、大声で話すこと、行列に並ばないことに集中している状況である。

また、台湾人観光客と比較し、地元住民のことを多く言及している。「昔と全く変わった、景色もそうだが、何より人が変わった。商売、商売、金儲けのテーマパークになってしまった。」「展望台のベストポジションを独占する地元の撮影隊が問題。」日本人観光客の書き込みからも地元住民の目にどのような外国人観光客が映るのが少し分かる。「地元の話では、過疎が進んでいたが、外国人観

光客の増加で、最近では都会へ行った子供たちが、Uターンして戻ってくるのだという。良かった。」「言葉が通じない外国人観光客相手に慣れてしまっているせいか、現地の方々の対応が不愛想な印象。」このように、外国人観光客の増加に歓迎する地元住民もいれば、本心では歓迎していないが、生計を立てる手段として、商売の相手にしているだけの住民もいる。

VI. 台湾人観光客に向けたまなざしの問題点

これまで、主に日本人観光客から見た外国人観光客の印象に関して紹介したが、筆者は二つの問題点に気づいた。一つは、割合として一番多い台湾人観光客への評価と、世間とマスコミで見る「日本と台湾の友好関係」とはかけ離れている点である。もう一つは、日本人観光客の書き込みから何度も出た現象であるが、台湾と中国本土出身の観光客の区別がつかない点である²⁰。前文にも言及したが、2015年の爆買い期でも中国人観光客の割合はインバウンド全体の15%に過ぎなかった。2015年までの長い間では、5%前後を維持しており、反対に、台湾人は8割を占める時もあった。本研究は特に日本人観光客の書き込みの時期に注目しているが、結論としては、2015年以前の書き込みから見ても、台湾人観光客への評価は非常に低かったという事実がある。その理由に関して、学術研究のポイントとして、深く掘り下げていきたい。

筆者は当初単純に「中国人観光客に好感を持っていない日本人観光客は同じ中国語を話す理由から中国人観光客と勘違いして、低い評価を付けた」と認識していたが、マナーが悪いと指摘する書き込みを分析すると、非常に具体的な行動が書いてあり、とても嘘のように思えないような内容と件数になっていることも否定できない。

では、もう一つの可能性に関してはどうか。僅か5%の中国人がたくさんのマナー違反のような行動を起こし、中国人だけ集中的に批判される結果の可能性に関しては、その批判的書き込みを読むと、「中国人観光客ばかり」のような表現とは矛盾している。それゆえ、この可能性も排除することができる。

この不可解な疑問を持ちながら、インターネットから二つのことを詳しく調べた。

まず、同じインターネット上で、明確に白川郷への訪問者の出身地域が台湾であることを知ったうえの日本人の反応を調べた。日本語サイト「台湾の反応ブログ²¹」で「白川郷」で検索した結果、2件がヒットした。一件は2019年11月4日に起きた白川郷荻町の小屋火災事件に関して、白川郷に訪問経験がある台湾人から心配の声が寄せられたブログである。もう一件は日本への観光地選びに白川郷を薦めたブログである。この二つのブログには、日本人からはたくさんのコメントがあった。「台湾人なら歓迎するよ、中国人と韓国人は互いの国行き来してくれ。」「飛騨高山の住民ですが、2013年の観光客は台湾からのお客様が第一位だったようで嬉しいです。2014年も、全市民上げてお待ちしておりますよ！世界遺産白川郷もライトアップされた合掌造りの家のコントラストが最高です、是非お越しください！」「台湾人はパスポート見せれば、交通費無料デーとか東北でやりたい。」「日本には最低4回来てほしい。春夏秋冬、全然違う楽しみがあるよ。」このように台湾人観光客歓迎一色であることが分かる。

二つ目は、一般の日本人の中国本土と台湾出身者の見分け能力に関して調べてみた。前出のサイト「台湾の反応ブログ」もこれに関して、中国本土と台湾出身者の見分け方に関して、日本人から多くの質問が寄せられている。威厳がありそうな書き込みがあったが、

恐らく中国本土と台湾出身者の両方から見ても失笑するような初歩的な内容であった。「見分け方は多少慣れが必要なのだが、歩く速さ、声の音量、態度で大体は見分けがつく。集団で声高に、ゆっくり蟹股歩きで態度が横柄＝中国。集団でも声の音量が小さく、蟹股で早歩き態度が普通＝台湾。見分けがつかない場合、わざと日本語で話す、反応するのが台湾、反応しないのが中国。」しかも、この意見に対して、多くの日本人賛同者がいることも驚きである。筆者は名古屋城でインバウンド観光客の対応時に観光調査した際、中国人と台湾人と一緒に働く日本人スタッフ、また外国人の採用を担当する日本人責任者に確認したが、中国経済発展で一般庶民の服装もおしゃれとなるに伴い、見た目、或いは話す言葉から見分けることが一般の日本人にとって、至難の業であると話していた。中国語学習経験者、あるいは現地での生活経験者でないと、確かに難しいことである。特に台湾人の中には祖先が福建省から移り住んだ人が多く、福建省出身者を同じ台湾人と間違える台湾人も少なくない。

VII. まなざしの二次加工性

以上の現状紹介を踏まえて、白川郷を訪れる日本人観光客と台湾人観光客の互いの印象ギャップについて、その理由を分析していく。結論から言うと、本稿事例では、相手に注ぐまなざしの「二次加工性」と「パス依存性」の二段階の構造に大きく関係していると考えられる。

イギリス人社会学者アーリ(John Urry)は、フコー(Michel Foucault)の臨床医学における権威あるまなざしからヒントを得て、「観光のまなざし」(tourist gaze)理論を提案した。臨床医学における医者から患者の体へのまなざしは一般的な観察者のまなざしではなく、一

種の制度上支持されている、強い力関係のあるまなざしであるとフコーは述べている。観光も同様に、金銭を出す側としての観光客は共同認識である観光の掟の支持の下で、観光客を受け入れる地元住民、特に途上国の住民に対し、ああして、こうしてと指示を出しながら、まなざしを注いでいる。「観光のまなざし」理論は各国の観光研究者の間でゲスト、ホスト、観光企画者、政府など観光をめぐるステークホルダーの力関係、社会観察の重要な理論として共有されてきたが、現在より広い範囲での研究が推進されてきた。

日本においては、「二次的なまなざし」という理論の切口から発信してきた研究者がいる。東浩紀は観光とオタク同人誌の「二次創作」と共通の性格を持つと指摘している。まず、無責任さであり、観光客は住民に責任を負わない。同じように二次創作者も原作に責任を負わない。観光客は、観光地に来て、住民の現実や生活の苦勞など全く関係なく、自分の好きなところだけ消費して帰っていく。二次創作者もまた、原作者の意図や苦勞など全く関係なく、自分の好きなところだけ消費して去っていく。従って、観光客が観光地の住民から嫌われるように、二次創作も原作者や原作の愛読者から嫌われることがある。観光も二次創作も共に、時間が経つにつれ受け入れられ、いつの間に住民や原作者の経済がそれなしには成立しなくなり、そういう皮肉な過程があるところも共通する²²と指摘している。また、コンテンツツーリズムの研究者岡本健が『n 次創作観光』というタイトルの著作でアニメ聖地巡礼は、アニメという二次元のコンテンツをきっかけに始まる行動であり、巡礼者の地域での様々な表現行為を行い、それを見た追随者や地域住民、マスメディアなど「観光地と直接関わりのない他者」まで大きく力を持つ観光形態である²³と分析している。以上の二例の共通点はアニメ、同

人誌という「二次元」の世界から観光を取り出していく点である。しかし、本稿で提示する「二次加工のまなざし」はそれと違って、本来のまなざしを人的、或いは無意識的に「加工」を行った後のまなざしである。

世の中の全ての「文化」には、「分類」という実践で溢れている。イギリス人の「文化」は「紳士的な文化」であり、イタリア人の文化は「ロマンティックな文化」である。人々は普段の生活の中で、自然にこのように分けられた「文化」のはっきりとしたラインで物事同質性と異質性の分別作業を行っていく。しかし、我々には意識しにくいことだが、「文化の分類」は一部の「性格、特徴」を選定すると、その他の「性格、特徴」を無視する作業を同時に行うことで実現されている。とある「文化」の範疇のなかでは、一個人の特徴は非常に重要な要素として認識されるが、この重要な特徴を失うことでその人の「性格」まで変更されることになってしまう。旅はある意味で個人の「性格」が失っていく過程でもある。特にマスツーリズムの発達により、ホスト側はしばしばこのような固定概念としてのレッテルをすべての外国人観光客に貼っていき、観光客が少ない時に重視されていた個人の「性格」は無視される。外国人観光客の滞在時間が短いほど、人数が多いほど、このような状況が生じやすい。前文で紹介したように、白川郷の台湾人観光客はバスツアーで2時間だけ滞在する形式が一番多く、このような条件の下で、ホスト側は無意識にマスコミで得る印象、或いは往年の印象から目の前の外国人観光客を「分類」していく。しかも、この「分類行為」はしばしば反面的な特徴が先に動いてしまう。日本のなかでもよく言われる「ケチな名古屋人」、「冷たい東京人」のような悪口のようなレッテルを先に思い浮かべる傾向が強い。このような思考回路の指導の下で、同じ地域からの外国人観光客

個人の性格はすべて無視され、「とある悪の集団の中の一員」として対応され、真のおもてなしの対象にならない。このような構造はさらにマスコミ、旅行記で再生産され、次々と合法化され、本来個人の性格を見てから付き合いをする伝統的な社交方法の崩壊につながっていく。本稿は、本来あるべきである個人の性格で判断するまなざしを「一次のまなざし」と定義し、ステレオタイプのまなざしを「二次加工されたまなざし」と定義する。情報の伝播が非常に早くなった現代社会では、このまなざしの「二次加工性」が残念ながら顕著になっている。

観光人類学の権威的研究者バレーン・スミスは観光者のタイプを分別し、その分別されたタイプごとにホストからのまなざしが違ってくることを指摘している。表2では、観光者の類型をまとめた。図1では、ピラミッドの各段の数字は表1の観光者類型を表している。一番下の段（7番）は団体客であり、来客数が一番多く、面積も一番大きい底の部分になっている。一方、逆三角形はホストから観光者への態度を表している。面積が小さい階ほど、ホストからの態度が冷たく、白川郷の台湾人観光客は団体客が多く、ホスト側（日本人観光客側）からの態度も一番冷たくなっている。

表2 観光者の類型と現地での適応度

観光者類型	観光客数	現地での適応度
1 探検者	極めて限られる	完全に受容
2 玄人の観光者	めったに見られない	十分に適応
3 破天荒な観光者	少ない	かなり適応
4 型破りの観光客	時々見られる	ある程度まで適応

5 初期マスツーリズム	一定のフロー	西洋的快適さを探索
6 マスツーリズム	絶え間ない入れ込み	西洋的快適さを要望
7 団体客	大勢来る	西洋的快適さを要求

注：スミス[24]11 頁に基づき作成。

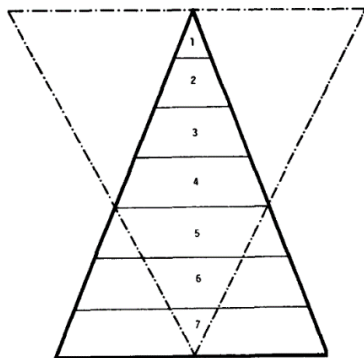


図1 観光客数とホスト側態度の関係図
出所：スミス[24]，15 頁

白川郷は東京と大阪を結ぶ所謂ゴールデンルートから、若干離れているので、中国人ツアーの通過点にならない場合が多い。そのため、訪日のリピーター、即ちある程度日本の文化に関心を持っている方、或いは理解力がある方が多い。前文でも紹介したが、台湾人の白川郷ツアーはやや高級志向の性質を持っている。また、筆者は現場で確認したが、両地域からの観光客も20代から40代までの若い世代に集中している。一般的に見れば、若い世代は年齢が上の世代よりマナー意識が高く、改善されているほうではないかと思われるにも係わらず、日本人観光客の書き込みから見ると、マナー問題が深刻のように見受けられる。筆者としては、写真をたくさん撮る点に関しては、共感できる部分もあるが、しかし、観光客の立場に立って考えれば、理解できなくもない。外国人は一般家屋と観光地の区別はつかず、日本人にとっての察しや常

識は外国人に通用しない部分が多い。ただ道路で写真を撮っていて怒られた観光客も、観光地として連れてこられたところで、写真を撮ったら怒られるのはなぜと疑問に思っているはずである。これはバスの中で、ガイドや添乗員がきちんと説明すればだいぶ改善される問題だと考えられる。それゆえ、本稿研究対象の台湾人観光客は中国本土出身者に間違えられているかどうかの議論を展開する前に、まず我々が旅行記から確認できた「まなざし」は「二次加工されたもの」であり、本来の姿と大きくかけ離れているものである事を頭に入れておく必要がある。

VIII. まなざしとパス依存性

日本人観光客と台湾人観光客の互いの印象ギャップが生じるもう一つの理由は経路依存性だと考える。「経路依存性(path-dependence)」は「パス依存性」とも呼ばれている学術名称である。経路依存性理論は1993年のノーベル経済学賞の受賞者であるダグラス・ノース(Douglass North)によって構築された。経路依存性とは、人間社会において技術の発展や制度の変遷が持っている「慣性」という物理的特性を指す。即ち、ある経路(善かれ悪しかれ)に入ると、依存性の生じる可能性があり、それは新しい選択を制約する²⁴。また、Campbell. J. は、偶然の事象や決定が構築される制度に帰着し、それが長期にわたって維持される傾向を持ち、将来的にアクターが利用可能な選択肢の幅が、たとえそれらがより長期的には効率的・効果的であろうとも、制約される過程である²⁵と定義している。換言すれば、あらゆる状況において、人や組織がとる決断は、過去の状況と現在の状況は現段階では全く無関係であったとしても、過去のその人や組織が選択した決断によって制約を受ける。

現代の鉄道レールの間隔の国際基準は1435 mm (4 フィート 8.5 インチ) である²⁶。なぜこの間隔を取ったかという、最初の鉄道は列車を製造する人間によって設計された。この間隔は列車の車輪の間隔であり、では、なぜ列車の車輪はこのような間隔を取ったかという、最初に列車の製造に携わる人間の前職は馬車の製造であった。列車車輪の間隔は馬車車輪の間隔であり、では、なぜ馬車の車輪はこのような間隔を取ったかという、この間隔はイギリスの道路の道幅から採用した。この間隔はイギリスの道路においては、馬車の車輪が壊れにくいといわれ、では、なぜイギリスの道路の幅はこの間隔を取ったかという、古代ローマ人から学んだ。イギリスを含めてヨーロッパにある古い道路の殆どは古代ローマ帝国軍により作られた。では、なぜローマ軍はこの間隔を取ったかという、ローマ軍の戦闘馬車の車輪の間隔だからである。さらに、ローマ軍の戦闘馬車の車輪の間隔は馬車を引く二匹の馬のお尻の幅から由来している。因みに、アメリカスペースシャトルの燃料箱の両側に推進器という装置がある。その装置が完成したら、列車で現場の近くまで運ばれるが、途中いくつかのトンネルを経由する必要があるため、結果として推進器の幅も鉄道レールの幅と一致しなければならない。結果として、何千年前の2匹の馬の尻幅は、宇宙開発のためにあるスペースシャトルの部品まで影響を及ぼしたということになる²⁷。馬の尻幅のように、最初の決定要素は「運命づけられた発展 (chreodic development)」と呼ばれている²⁸。一旦、既成のものが規模拡大されると、他のものが例えもっと合理性があっても、簡単に既成のものと競争できない。これは電気自動車がなかなか世界中で普及済みのガソリン自動車に取って代わられない理由である。鉄道レールの国際基準ができると、他のレール幅は完全に参入できなくな

ることも予測できる。このようにフィードバック効果が強く働いて変動が起るとき自己増殖しながら安定的な経路を歩く現象は「ロックイン (lock-in) 効果」と呼ばれている²⁹。

この経路依存性理論はもともと経済学の世界で開発されたものだが、その後、政治の世界にも広く応用されるようになった。では、本稿の「まなざし論」という観光人類学のアプローチとはどのように関係があるのか。前文で台湾人観光客の白川郷の印象に関して、代表的な旅行記を紹介したが、自分のことは日本人観光客の手によって、如何に悪く書かれているかにも拘らず（多分筆者のように、両サイドの書き込みを比較する台湾人観光客がいないので、この事実を知る台湾人観光客はめったにいないと思う）、台湾人観光客の目に、白川郷は天国のように映り、地元住民また日本人観光客のことも非常に高評価を出す人が殆どである。経路依存性理論は、物事において歴史的経緯が非常に重要であると教えてくれる。本稿で提起した台湾人の日本人に対する好印象の形成原因は、日本人の台湾植民時代に遡る。台湾は1895年に清朝より割譲され、日本の初めての植民地となった。目的はとにかく、事実上、日本は台湾全島のインフラ整備、衛生水準の向上の政策を主導していった。それゆえ、戦後台湾においては長らく国民党の強固な政治体制に置かれたが、本土化政策が施行されて以降、国民党時代への反動として、人々はより自由な価値観を求めるようになった。植民地時代における、日本統治の功労への認識強化も自由価値を表現する手段の一つとして社会の潮流となった。多くの台湾人の胸に日本への親近感を抱く感情、或いは日本植民地時代への懐旧の感情は、よくストックホルム症候群³⁰の表れと言われる。しかし、ストックホルム症候群は事件直後（本稿の場合は台湾における植民統治）、またはその後の一定期間には適用されるが、

植民地時代終結後、75 年も経つ現在の台湾には、親日感情は経路依存性で解明するほうがふさわしいと考えられる。

台湾人の親日感情は政治・経済・文化などの各側面に影響を及ぼしているが、言うまでもなく台湾人の訪日観光にも非常に大きい影響を与えている。地理的に近いだけではなく、戦後でも活躍する日本語世代の台湾人は観光業での市場開拓において、言葉の壁がなく、50 年の長い間、叩き込まれた日本文化の共有もでき、日本市場での太いパイプを持つことができた。経路依存性の制約要素の一つとして、経済的規模(Economics of scale)が挙げられている。訪日観光は台湾旅行社がいち早く布陣してきた観光の主力商品であり、日本と台湾の間に就航しているフライトも豊富で、価格も有利であり、他国ツアーの参入ハードルが高くなっている。日本経済の地位、日本製品の品質も日本ブランドの強い信頼感を作り上げ、長い間、台湾人の海外旅行のなかで、訪日観光はステータスの一種として共感されてきた。ある意味では、訪日観光は安定した経路として「ロックイン (lock-in)」された。それゆえ、毎年総人口の五分之一が訪日するようなことは簡単なものではなく、長い年月の積み重ねた結果である。白川郷の宣伝ポスターは大雪に覆われる合掌造り家屋の集落を中心に展示し、日本の田舎村落の静かな雰囲気を出しており、台湾人観光客は白川郷の特徴を訪日前にポスターを通して頭の中でイメージする。アリーが言う、観光は記号を再確認し、収集する過程である。現地に着いたら、台湾人観光客は早速カメラを取り出し、白川郷の特徴的な記号を集めることに没頭する。しかし、この「外国人観光客がパチパチ写真を撮る」ワンシーンは二次的まなざしの思考回路の下で、マナーが悪い外国人観光客の「記号」として日本人観光客の旅行記の中に記録されてきた。経路依存性のもう一つの

制約要素として、「学習効果 (learning Effect)」がある。先に白川郷を訪れた台湾人観光客は旅行記の中で大満足し、絶賛の感想を綴ることになった。これを読んだ人も訪れ、さらに同調の感想を拡散していく。この「学習効果」の下で、日本人観光客が「失った原風景」にがっかりした白川郷は、台湾人観光客には「完璧に保存された日本の原風景」として絶大な支持を得ている。日本のマスコミが大きく問題視したオーバーツーリズムの行列も Tripadvisor 上には、台湾人からの低評価が僅か 1 件という信じがたい結果となった。台湾人観光客の日本観光はこのように経路依存性の要素が多く確認できる。

では、反対に日本人観光客からのまなざしはどうであろうか。そのギャップも経路依存性理論で説明できる。日本植民地統治の経験などの歴史的な原因から、多くの日本人は台湾に対して親近感を持っている。訪日台湾人観光客数には勝てないが、台湾は日本人にとって 1 位 2 位を争う人気観光地である。過去の日本の面影を求めて、台湾へ観光に行く日本人も少なくない。日本のものだと聞いて、内容を問わず高評価をしがちな台湾人と同様、日本人も台湾と聞いて、同士同盟のようにすぐ反応しがちである。しかし、この「経路依存性」が作用する前提条件は、相手が台湾人と明確に判断できることである。仮に事前の統計データを把握しなかったら、白川郷を訪れる外国人の 8 割以上がアジア人であると聞いて、筆者も自然に「その大多数は中国人だろう」と先入観を持ってしまい、白川郷を訪れる日本人観光客もそうする人が多いと思われる。筆者はそれを知らずに現地に踏み入れて、すぐに「台湾人ばかりだ」と気づくが、日本人観光客は中国語を聞いても簡単には見分けられない。結果として、台湾人への「経路依存性」が起動せず、中国人への「経路依存性」が起動し、ロコミの中の深刻な「中国

人マナー問題」の出現、再生産に繋がった。ネット上の台湾人ブログの白川郷に対する書き込みを見て、歓迎の一边倒のような日本人のコメントを比較すれば、「経路依存性」の存在は明らかである。

IX. おわりに

以上、観光現場でのフィールドワークで気づいた問題点から、まなざしの「二次加工性」と「経路依存性」という影響要素を提示した。ブログの書き込みから見ると、台湾人観光客の言動は「片思い」のように思われる一方、本来人数から見れば非常に少ない中国人観光客は舞台上上がっていないにも関わらず、主役のような扱い方をされてきた。観光のまなざしは実に複雑であり、多くの影響要素に左右される。本稿で提示した日本人観光客のまなざしは観光現場では普遍性がある事象である。本稿執筆時、新型コロナウイルスが猛威を振るう欧米では、日本人を含むアジア人への差別的な「まなざし」もたびたび報道されたりするが、本質では同じである。白川郷の観光産業も甚大な被害を被っている、一日も早く事態が収束し、白川郷にまた大勢の外国人観光客が戻ることを願っている。

脚注 *

- ¹ (中国)集美大学日本語学部専任講師。本稿は愛知大学国際中国学研究センター2020 年度若手研究助成の研究成果である。
- ² 世界 12000 の国と地域を網羅したネットの「旅行ガイドブック」や国内、海外の宿泊施設やツアー、航空券、レンタカーなど主な予約サイトを一括比較検索できるコンテンツを持つ旅行サイト。カカコムの子会社。口コミ

- 件数は 200 万。HP=4travel.jp。以上宿泊施設情報サイト「ホテリア」が 2018 年 12 月に調査した情報。 https://www.hotelier.jp/hotel_comp/4travel(2020-3-29 アクセス)
- ³ 世界最大な閲覧数を持つ旅行口コミサイト。HP=tripadvisor.jp。
- ⁴ 市川・羽田・松井 [5] 。
- ⁵ 白川村観光振興課 [14] 。
- ⁶ 文化庁 [18] 。
- ⁷ テータ出所：白川村役場 HP, <https://shirakawa-go.org/mura/toukei/2580>(2020-4-14 アクセス)
- ⁸ 例えば、佐滝 [10] , 117 頁。
- ⁹ 日本政府観光局 [19] , 105 頁。
- ¹⁰ 林 [23] , 31 頁。
- ¹¹ 日本政府観光局 [19] , 107 頁。
- ¹² Klook : 旅行アクティビティ・現地ツアーのオンライン予約を扱う大手オンライン旅行会社。2014 年設立、本社は香港に置いてある。東京、大阪にオフィスがある。HP による, <http://www.klook.com/zh-TW/>(2020-4-28 アクセス)
- ¹³ KKday : 運営形態が Klook と非常に似ている台湾最大のオンライン旅行会社。2014 年設立、アジアの都市を中心にサービスを提供している。東京にオフィスがある。HP による, <https://www.kkday.com/zh-tw/>(2020-4-28 アクセス)
- ¹⁴ 澁谷 [12] 。
- ¹⁵ サイト「Livedoor news」の「台湾ブログ：白川郷で宿泊、雪に覆われた童話のような村」, 2013 年ブロガー Euphtw によるもの。 <https://news.livedoor.com/article/detail/7438609>(2020-4-30 アクセス)
- ¹⁶ Tripadvisor「白川郷合掌造り集落」項目での書き込みが 2151 件あり、低評価は 43 件だった。そのうち、日本語による書き込みは 23 件で、出身地域が台湾と記しているのはわずか 2 件だった。 <https://www.tripadvisor.jp/Attrac>

- tion_Review-gl119912-d1407426-Reviews-The_Historic_Villages_of_Shirakawa_go_Gassho_Style_Houses-Shirakawa_mura_Ono_gun.html (2020-4-15 アクセス)
- ¹⁷ 以降の書き込み例は特に説明がなければ、いずれも tripadvisor.jp 「白川郷合掌造り集落」口コミページから、ページアドレスは脚注 16 参照.
- ¹⁸ 「日本の原風景…春先の世界遺産白川郷に多すぎる予測不能の外国人観光客」, [https://4travel.jp/travelogue/10880060\(2020-8-20](https://4travel.jp/travelogue/10880060(2020-8-20) アクセス)
- ¹⁹ 「白川郷、吹雪のライトアップ」, [https://4travel.jp/travelogue/10974231\(2020-8-20](https://4travel.jp/travelogue/10974231(2020-8-20) アクセス)
- ²⁰ 台湾は中国の一部であるとする日本人はもちろんいるが、筆者の日本での生活体験、日本のマスコミでの呼び方、また旅行記の書き込みに頻出する「台湾は中国よりまし」のような表現から、本稿はこのような書き込みに関して、中国とは「台湾とは別の、中国本土のこと」を指すと理解した上での調査となる.
- ²¹ 台湾のニュース、台湾のネット掲示板で話題になっている内容、台湾人の個人ブログ、また台湾関連の動画などを翻訳して紹介するブログ. HP=<https://www.taiwannohannou.com>.
- ²² 東 [3], 45 頁.
- ²³ 岡本 [7], 90 頁.
- ²⁴ 曹・橋本 [17], 57 頁.
- ²⁵ 溝端・堀江 [20], 338 頁.
- ²⁶ 筆者も調べたが、日本も大体この基準を採用している. 標準軌道は日本では新幹線、近鉄、京成など一部、他は狭軌道. 「日本鉄道のページについて」, [https://www.stargaze.co.jp/alone/gauge.html\(2020-5-12](https://www.stargaze.co.jp/alone/gauge.html(2020-5-12) アクセス)
- ²⁷ 李 [22], 10-11 頁.
- ²⁸ 溝端・堀江 [20], 338 頁.
- ²⁹ 溝端・堀江 [20], 338 頁.
- ³⁰ ストックホルム症候群とは、誘拐事件や人質監禁事件などで犯人と長時間過ごした被害者が、犯人に対し同情や好意的感情を抱くようになる心理的な現象をいう. 1970 年代にスウェーデンの首都ストックホルムであった銀行強盗事件の際、人質が犯人に協力する行動をとったことからそう名付けられた. 出所: 産経新聞オンライン, 2020 年 8 月 1 日国際版, 「文政権はストックホルム症候群」, [https://www.sankei.com/world/news/200801/wor2008010001-n1.html\(2020-8-21](https://www.sankei.com/world/news/200801/wor2008010001-n1.html(2020-8-21) アクセス)

*参考文献

- [1] 麻生美希「開発が変える地域——白川郷・武富島のコミュニティ・ベースド・ツーリズム」, 西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編著 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする 16 章』, ミネルヴァ書房, 2019 年
- [2] 麻生美希・西山徳明「白川郷の合掌造り集落における景観保全の新たな手法に関する研究——岐阜県大野郡白川村荻町を対象として」, 『日本建築学会計画系論文集』79 巻 700 号, 2014 年, 1373-1381 頁
- [3] 東浩紀『ゲンロン 0 観光客の哲学』, GENRON, 2017 年
- [4] 市川康夫・羽田司・松井圭介「白川郷における農村像と住民の生活様式」, 『人文地理学研究』36 号, 2016 年, 29-42 頁
- [5] 市川康夫・羽田司・松井圭介「日本人・外国人ツーリストの観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光」, 『人文地理学研究』36 号, 2016 年, 11-28 頁

- [6] 伊藤薫「グローバル経済と飛騨地域の観光産業——外国人観光客の増加は可能である」,『岐阜聖徳学園大学紀要』14巻3・4号,2014年,63-94頁
- [7] 岡本健『n次創作観光 アニメ聖地巡礼・コンテンツツーリズム・観光社会学の可能性』,NPO法人北海道冒険芸術出版,2013年
- [8] 黒田乃生「世界遺産白川郷」における観光の現状と課題」,『ランドスケープ研究』73巻2号,2009年,108-109頁
- [9] 黒田乃生「合掌造り家屋と集落の再生——白川郷と五箇山の事例」,『農村計画学会誌』Vol32, No.2, 2013年,117-123頁
- [10] 佐滝剛弘『観光公害——インバウンド4000万人時代の副作用』,祥伝社新書,2019年
- [11] 佐藤悦夫「外国人から見た五箇山と白川郷 観光地としての魅力の検討」,『富山国際大学現代社会学部紀要』第7巻,2015年
- [12] 澁谷鎮明「ふたつの高山——海外からの団体ツアー客・個人客の視点と観光行動」,『貿易風』第9号,2014年
- [13] 澁谷鎮明「宿泊施設の「ゲストブック」を用いた訪日個人客の観光行動の多様性と観光地評価の変化に関する研究——岐阜県高山市の事例」,『貿易風』第12号,2017年
- [14] 白川村観光振興課『統計:観光客入込み数』,2018年
- [15] 鈴木北斗「観光がもたらした「文化」の変容と保全——岐阜県白川村荻町地区の事例から」,東洋大学社会学部卒業論文,2011年
- [16] 芹澤知広「世界遺産の保全と活用を支える社会的ネットワーク——岐阜県白川村とベトナム・ホイアンの事例から」,『総合研究所所報』14号,2006年,75-95頁
- [17] 曹希・橋本努「中国経済移行期における経済倫理の経路依存」の概要と中国における経済倫理の変遷に関する考察」,『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』5,2016年,57-63頁
- [18] 文化庁『世界遺産一覧表記載推薦書 日本/白川郷・五箇山の合掌造り集落』,1994年
- [19] 日本政府観光局 JNTO『訪日旅行誘致ハンドブック アジア6市場編』,2019年
- [20] 溝端佐登史・堀江典生「市場経済移行と経路依存性——体系的レビュー」,『経済研究』64(4),2013年,338-352頁
- [21] 楊潔「サステイナブル・ツーリズムの展開と可能性——白川郷における観光の現状と展望」,『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』7号,2006年,115-144頁
- [22] 李敏「鉄軌和馬屁股」『少年科学』2012(9),2012年,10-11頁
- [23] 林涛「日中台三地域の観光行政体制の比較」,『愛知論叢』108号,2019年,31-53頁
- [24] 瓦倫・史密斯『東道主与游客——旅游人類学研究』,張曉萍譯,雲南大学出版社,2001年